

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00307

研究課題名(和文) 義堂周信研究 対人関係と文学観に着目して

研究課題名(英文) Research on Shushin Gido Focusing on interpersonal-relationships and literary views

研究代表者

太田 亨 (OTA, TORU)

広島大学・人間社会科学研究科(文)・准教授

研究者番号：80370021

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：義堂周信の詩文集『空華集』の訳注を通じて、義堂と交流があった禅僧の経歴・義堂との関係等を明らかにし、義堂が関東に赴いた際の心境や周りの状況を読解・理解することができた。また義堂周信の文学観として、生涯をかけて偈頌の選集に取り組んだことを追究した。若くして編んだ『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』と、臨終の間に完成させた『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』について、両書の書誌、両書の関係等を調査し、結果、分類の多様化・律詩の増加・日本で詠まれた偈頌の増加といった相違点が見られた。そこには若年僧に対する教育的配慮が存すると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで義堂周信は、禅林における一般的詩文の習得を推進し、宗旨重視の風潮を緩和した人物として評されてきた。しかし、実際には宗旨を含んだ偈頌を重視し、その総集を編纂することに生涯をかけていた。また、自身が詠んだ詩文についても、表面上は一般的詩文と変わらないが、精査すると宗旨的要素を含んでいる場合が多いことが分かった。以上のことから、従来の義堂像を新たに構築し直す必要があると言えよう。そのためには、『空華集』を引き続き丁寧に読解していくしかないと思われる。

研究成果の概要(英文)：Through the translation and commentary of Gido Shushin's collection of poems, Kukashu, I was able to clarify the background of the Zen monk with whom Gido interacted, his relationship with Gido, and so on. I was also able to read and understand Gido's state of mind and surroundings when he went to the Kanto region. I also pursued Gido Shushin's view of literature, which was that he spent his entire life working on a selection of chants. "Shinsenjowashu" he edited at a young age and "Jukanjowashu" he completed near his death were taken up, and the bibliography of both books and the relationship between them were investigated. As a result, differences were observed in the diversification of classifications, the increase in the number of eight-line poems, and the increase in the number of chants composed in Japan. This is thought to be an educational consideration for young monks.

研究分野：日本漢文学(中世禅林の文学)

キーワード：義堂周信 空華集 新撰貞和分類古今尊宿偈頌集 重刊貞和類聚祖苑聯芳集 偈頌

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現在、禅林の文学研究は各方面から積極的な調査・研究が進められているが、禅僧個人の人となり及びその文学を究明した論考は殆ど見られない。それは、傑出した一人の文筆僧の作品について、禅林で創出された作品の特異性を理解した上で、それに相応しい方法で丹念に読解することが成されていないことに原因があると考えられる。

禅僧の作品には、法語や公的文書等、様々な表現形式がある上、師承関係、武家や貴族との繋がり、寺院間の交流、禅僧間の交遊関係といった具体的事象が多分に含まれている。また、直観で得た感覚を問答や比喻を多用して表現したり、中国の外集・内典を典拠に用いて観念的世界を表現したり、一般詩文とは異なる特異性が見られる。これらのことが禅僧個人の人となり及びその文学を究明する障壁となっているのである。

以上のことを踏まえた上で、義堂周信を研究対象とし、詩文集『空華集』・語録『義堂和尚語録』・日記『空華日用工夫略集』・偈頌の選集『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』・抄物『東山和尚外集抄』を調査・読解することとした。特に義堂の人となり・文学観・交友関係を追究するには『空華集』の読解が必須であるため、2019年度より「空華集訳注」を行い、その成果を公表している。その際、現代人の感性で、現代の辞書類を使って訳注するのではなく、中世禅林における文筆僧の感覚・知識を考慮に入れ、当時の辞書・抄物・他の文筆僧の別集等を用いて多面的に訳注を行うようにしている。

朝倉尚氏は、本研究に関わる研究活動として、「義堂周信『空華集』の基礎的研究 - 部類構成と作品配列を指標として - 」(『日本研究』第18号、P1-P28、2005年3月)・「義堂周信『空華集』をめぐる - 禅林文学研究者の憂鬱 - 」(『国文学』第185号、P1-P16、2005年3月)を公表し、『空華集』の各版本の基礎事項について言及している。また「五山版『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』考 - 「大日本仏教全書」所収本文の補完をめぐる」(『禅文化研究所紀要』第28号、P1-P34、2006年2月)・「五山版『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』の刊行をめぐる - 義堂周信の存在証明 - 」(『国語国文』第74巻第6号、P1-P19、2005年6月)を発表し、偈頌集の編纂状況について詳しく論じている。

2. 研究の目的

研究代表者は、義堂周信(1325-1388)の詩文集『空華集』所収の全作品を読解・訳注し、その生涯と文学営為について解明するという全体構想を抱いており、それに向けて以下の3項目を達成する目的で本研究に取り組む。

、義堂が関係を有する人物に対して、どのように思い、どのような関係を築いていたのかを解明する。

、義堂が内典・禅的外集(偈頌・疏等)・一般的詩文(世俗の漢詩文)をどのようにとらえ、禅僧が行うべき文筆活動について、どのように考えていたのかを解明する。

、『空華集』所収の作品を読解・訳注し、随時訳注稿を公表する。

とを達成するためにを行うことが必要であり、は本研究期間以後も継続して行う。

3. 研究の方法

、義堂がどのような対人関係を築いていたかについては、日記『空華日用工夫略集』を拠り所にして、禅僧・公家・武家等と行った事蹟が既に指摘されている。しかし、それらの指摘は、表面上の交友関係と行為に止まっており、義堂の心情にまで踏み込んだものは無い。本研究では、『空華集』における該当する対人詩を読解することで、従来指摘されている交友関係とその営為の深部を解明する。ただし、当然ながら、日記類・他の禅僧の作品集も含め、幅広い資料を用いて総合的に考証する。

、義堂周信の文学観については、禅林の一般的詩文に関する文筆活動を推進した人物として評されている。『空華集』の夥しい作品数を見れば、その評も説得力があるように見えるが、作品の詠出内容を吟味した上での評ではない。義堂が目指した文筆活動はいかなるものだったのであろうか。そこで、従来着目されていなかった義堂周信選偈頌集『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』と『空華集』との作品との関係も解明する。そのために、まずは義堂が求めた作品集のあり方を解明するのを目的とし、不備のまま刊行された『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』と、生涯をかけて編集した偈頌集『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』とを比較し、両者の異同や特徴について調査する。義堂が求めた偈頌のあり方を追究する。この点について、朝倉尚氏が研究を進めており、氏の協力を得ることが可能である。氏は、代表者に協力しながら、その成果を著書「禅林の文学 詩文総集・偈頌総集の基礎的研究」(仮題)を刊行する予定である。

、義堂の人物関係・文学観を考究するに当たっては、『空華集』の読解が必要不可欠である。そのため、一方で深く『空華集』を読解し、訳注稿を随時公表する。訳注する際には、中国文学の訳注法と日本文学の訳注法を兼ね合わせて読解・訳注を施していかなければいけない。また典拠については内典・禅的外集・一般的詩文集を博捜し、抄物を活用することによって、な

るべく中世禅林で行われた語句の解釈・考え方で『空華集』の作品を読解する必要がある。

4. 研究成果

本研究では、 が中心になる予定であったが、協力者に予定していた朝倉尚氏が急逝したため、 を中心に行った。

まず についての成果として、朝倉尚著『禅林の文学 「偈頌の総集」「詩の総集」に関する基礎研究』を清文堂より刊行した。その第一部において、「偈頌の総集」として、義堂周信が編んだ『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』（略称「新撰貞和集」）と『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』（略称「重刊貞和集」）を研究対象としている。第一章では、「義堂周信の存在証明」と題し、五山版「重刊貞和集」の原稿が完成・刊行されるまでの経緯を紹介し、義堂周信の生涯が「貞和集」に始まり、「貞和集」に終わっている様相を示した。第二章では、「五山版『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』考」と題し、義堂の存在証明とも言える「貞和集」であるが、現在、「大日本仏教全書」に所収される「新撰貞和集」と「重刊貞和集」は利用されているとは言い難いため、大日本仏教全書所収「新撰貞和集」に存する不備・脱落丁を補完し、両者のテキストを整備し、比較するための準備を整えた。第三章では、『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』考」と題し、「新撰貞和集」と「重刊貞和集」の両者について、作品数・部類・詩型について比較する。「新撰貞和集」から「重刊貞和集」を編集するに当たって、相当数の重複する詩が存するも、作品数だけ見ればおよそ六三〇首も増加し、部類の数も増えてより細やかに作品が分類されている。特に目立つのは、「新撰貞和集」ではほぼ絶句形式の詩であったのが、「重刊貞和集」では律詩形式の詩が大幅に増えている点である。また、「重刊貞和集」は五山版以降、江戸期に版式を変えて数回刊行されており、それぞれの版の比較を行い、書誌事項を詳細に調査している。両書の実態が明らかになったところで、第四章では、『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』から『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』へ」と題し、渡来僧の無学祖元と清拙正澄の作品が、両書にどのように入集されているかを調査し、その特徴と原因について論じている。無学と清拙の作品は、両書に多数入集しており、「重刊貞和集」に新たに入集した作品を分析した結果、日本に渡来した後の作品が増えており、その内容が日本僧にとって馴染み深かったのではないかと結論している。

『禅林の文学 「偈頌の総集」「詩の総集」に関する基礎研究』では、付章「義堂周信『空華集』諸本の性格」として、 と に関係する『空華集』についても言及している。現在容易に利用できる「五山文学全集本」は、不分巻である五山版を再構成して二〇巻本に編成した元禄九年刊版本を大略底本としている。三書の成立・内容・相違点を調査・検討し、「五山文学全集本」の処遇について、テキストとして用いても差し支えないという著者の見解・評価を述べている。

朝倉尚氏の著書を刊行するに当たり、上記の内容のすべてを確認・校正した。題名に「基礎研究」とあるように、義堂周信を研究、特に文学観を追究する上で必須の事項が述べられている。本書を校正して刊行することは、五山文学研究者にとって大いに役立つであろう。

 の研究成果は、 の研究成果に関連している。期間を通じて、『空華集』の訳注を行い、公表した。作品には、僧階や師承関係、武家や貴族との繋がり、寺院間の交流、禅僧間の交遊関係といった具体的事象が多分に含まれ、さらに内典・禅的外集を典拠に持つ作品が殆どである。それらを逐一解明するのに、多分の労力を費やした。対人関係については、訳注の中で、いくつかの点を明らかにした。これまで全く注目されていなかった仲明 察（系字不明）の出身・本師・受戒等の経歴を明らかにした。義田 了（系字不明）と義堂との関係については、禅林の荒廃を相談するほどの親密な間柄であり、互いに詩を唱和することが多かったことを明らかにした。実中 華（系字不明）については、道号がつけられた経緯や義堂の兄弟子・玉泉周皓との関係を明らかにした。復初 朴（系字不明）については、建仁寺僧であったことや、他の禅僧とも唱和を行い、延文六年に示寂したことを明らかにした。詩題には「端蔵主」としかないが、端蔵主が無倪（猯）文端であること、義堂が関東に赴いた際に、親しくしていたこと等を明らかにした。大喜法忻については、義堂が信頼し、関東に赴いた際に出処進退の世話をしてくれた人物であることを明らかにした。対人関係以外についても、主として義堂が関東に赴いた際の心境が詠まれている作品が多く、当時の義堂が置かれた状況や、門派に対する考え方を読解・理解することができた。これらは、一見すると、たいした成果に見えないが、今まで注意を払われていなかった人物であり、義堂の日記や他の禅僧の作品集を調査して始めて分かることである。こうして地味で多大な労苦を要する作業を続け、少しずつ義堂の人間像および対人関係を明らかにしていく必要がある。

以上のことを通じて、これまで義堂の作品が一般詩文と変わらず平易であるとの評価がなされていたが、全くその評価が異なることが分かった。義堂は、大陸の偈頌を尊重し、それらを禅林に広めるために総集を編集し、さらに自身もそれらの偈頌に匹敵するような作品を詠んでいたのである。この義堂の文学観はいまだに解明されていない。研究を始めた当初とは全く異なる義堂像が構築されてきており、今後さらに訳注を通じて、研究を深化させる必要があると言えよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 太田 亨	4. 巻 69
2. 論文標題 『空華集』訳注 七言絶句部（三）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛媛大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 pp110-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田亨	4. 巻 68
2. 論文標題 日本における柳宗元集について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛媛大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 283-296
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田 亨	4. 巻 19
2. 論文標題 『空華集』訳注 七言絶句部（四）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 中国古典文学研究	6. 最初と最後の頁 97-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 太田亨（共著・芳澤元編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 448
3. 書名 室町文化の座標軸（論題「日本中世禅林における中国文学受容について 応永年間を中心に」）	

1. 著者名 朝倉尚	4. 発行年 2024年
2. 出版社 清文堂出版	5. 総ページ数 604
3. 書名 禅林の文学 「偈頌の総集」「詩の総集」に関する基礎研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関